
4 . 寂

森瀬ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4・寂

【Nコード】

N5022P

【作者名】

森瀬ユウ

【あらすじ】

茶道部・鈴木一彦視点2

通り過ぎてしまった季節を嘆くのは無駄なことだ。夏日の連続記録を更新しながらも、照りつける真夏の太陽はすで遠ざかり、空はすっかり秋へと様相を変えていた。昨日通り過ぎた台風の影響で気温は高いが、真夏ほどの不快感はない。

朝のホームルームを控えた教室の中。机に突っ伏し睡眠不足を補う者、出された宿題に取り組む者、会話に花を咲かせる者。空いた時間を消化する方法は人によって様々である。

「それですげム力ついたんだよ！　って、ヒコ、聞してる？」

外から差し込む光を誰よりも堪能出来る窓際の席で、一彦は目の前に座る友人の悠基の愚痴を聞いていた。本来一彦の前の席は悠基が指定された場所ではない。しかし彼は教室に入ってくるなり本来の持ち主が不在なのをいいことに、勝手にその席に陣取ってしまった。悠基は後ろ向きに椅子に座って、一彦の机に頬杖をつきながらひとりで喋り続けている。

（よく疲れないなあ）

定期的に相槌を打ちながら、一彦は思わず感心してしまう。あまり人と話するのが好きではない一彦は悠基の気持ちちが理解出来ない。けれども自分に向かって話しているのだから、きちんと聞いてやりたいと思う。

「ちゃんと聞してるよ」

むくれる悠基にそう応えると、彼はへへへと笑った。そして再び怒りを露わにし始める。感情も表情もころころと目まぐるしく変わる、彼はそんな人間だった。

「マナーアップ運動なんてなくなればいいのに」

口を尖らせて悠基が呟く。

一彦と悠基が通う高校にはマナーアップ運動と呼ばれる生徒指導がある。月に1度、朝の通学時間帯に教員が交代で2箇所ある校門

に立ち、生徒が外見的校則違反をしていないかを確かめるというものだ。校則違反が見つかった生徒はその場で説教をされ、名簿に印が付けられる。そして5回名簿に印が付いた生徒は直々に校長室に呼び出されるというシステムとなっていた。

悠基の話によると、彼は今朝実施されたマナーアップ運動で生徒指導教員にその茶髪とピアスを見咎められ、こっぴどく叱られてしまったようである。1週間以内に髪を黒く染めるという約束をさせられ、また、それ以上に教員の言い方がム力つく、と、悠基は酷く腹を立てていた。

「その気持ち分かるよ」

「なあ」

そばにいたクラスメイトたちが口を揃えて悠基を援護する。

始めは一彦と悠基の2人で話をしていたはずだったが、悠基の剣幕に引き寄せられるようにして、気が付けば2人を中心にクラスメイトたちが集まってきた。彼らは適当に相槌を打ちながら一彦と一緒にあって彼の話を聞いたり、また同意したりしている。悠基が座っている席の本来の主でさえ、何故か文句を言うことなく立ったまま会話に参加していた。

「注意されるのが嫌なら直せばいいだろ」

そんな悠基への同調の嵐の中、誰がどう見ても校則違反の「こ」の字も見当たらない一彦がそうさうつと言いつつ放った。悠基が目を見詰めて、場が一瞬静まり返る。しかし直ぐに悠基が抗議した。

「そうだけど、それはそうなんだけど！ ム力つくものはム力つくじゃん。それに俺は誰にも迷惑掛けてないよ」

誰にも迷惑を掛けていない。悠基の言葉を聞いて、一彦は疲れた様子で呟いた。

「……お前の愚痴を聞いてる今この瞬間、俺が迷惑を被ってるんだけど」

そして深く溜息を吐く。

「え、」

一彦のそんな様子を見て、悠基は言葉を失った。

髪を染めようがピアスをつけようが、正直一彦はどうでもいいと考えている。個人の好きなようにすればいい。けれどもそれを禁止する規則があるのならば、守らなければいけないと思う。何故そう決められているのか、という疑問を抱くこともない。そういうものだからだ。唯々諸々に従う、それは思考を失っていることと同然かもしれない。けれども一彦は思う。それが間違っているなどと、一体誰に断言出来るだろう。従うことで波風立たずに生きていけるなら、それもひとつのやり方なのではないだろうか。

確かに悠基は髪を染めることで直接的には誰にも迷惑を掛けていない。しかし校則を破った結果教員に怒られその愚痴を誰かに聞かせることは、間接的な迷惑であるとも言えるだろう。そう考えて、一彦は先の言葉を発したのであった。

その考えに気付いたのかどうかは分からない。けれども悠基はしよげた口調で言った。

「ごめん」

「別に、いいよ。それにどうせ染め直す気なんてないんだろ」

「あ、凄いねヒコ。分かる？」

しかしそれに応えた一彦の言葉を聞いて、悠基がにと人懐っこい笑顔を見せてくる。やれやれ、と、一彦は悠基に気付かれないように再び軽く溜息を吐いた。

「こうなったらとことん逆らってやろうと思って」

けれどもそれでこそ佐藤だとも思う。叱られて簡単に屈してしまふような中途半端な人間であつたら、こうして一緒にいることもないだろう。そして彼がそうでないことは、中学生の頃から知っていた。

「でも確かにアイツはム力つくよ」

「俺なんかこの間ちよつと廊下で騒いでただけで怒鳴られたんだぜ」
「いつか痛い目に遭わせてやりたいよなあ」

口々に周囲に集まっているクラスメイトたちが件の生徒指導教員

に対する不満を露にし始めた。残念ながら彼は学内でも大変不人気な教員であった。生徒指導、という役回りのせいもあるだろうが、その高圧的で横柄な態度も生徒たちから嫌われる原因のひとつとなっていた。

「そうだ！」

すると悠基が突然大きな声で周囲の声を遮った。何かを思いついたようである。

「なんかアイツにイタズラでも仕掛けようぜ」

そう言って目を輝かせた。そして目の前に座る一彦に白羽の矢を立てる。

「やろう、ヒコ！」

「え、嫌だよ」

しかし一彦は即答で悠基の言葉を一蹴した。教員に悪戯を仕掛けるという馬鹿馬鹿しくて何の得にもならないことを、何故自分がしなければならぬのか。悠基が抗議の声を上げるが一彦は一切取り合わなかった。

諦めた悠基が、今度は周りで話を聞いていたクラスメイトたちを誘い始めた。しかし彼らは一様に首を横に振る。

「いや、俺はいいや」

「俺も」

その様子を見て一彦は思う。

（つまらない奴らだな）

クラスメイトたちはいったって生徒指導教員に対して不満を口にしていた。つい先ほどだってそうだ。しかしそれは口だけで、いざとなると誰も行動を起こそうとはしない。口先だけで何もやらないくらいなら、最初から何も言わない方がまだマシだ。一彦はクラスメイトたちの態度に軽く失望を覚えて気分を重くした。

一方、悠基もそんなクラスメイトたちの反応に落胆したらしく、再び視線を一彦のほうに向けた。

「ヒコおー」

そして何故か恨みがましい視線を向けてくる。同時に期待の込められた眼差しで見つめられ、今度は一彦は無下に断ることが出来なくなってしまうた。

（本当に、俺は佐藤に甘いな）

そう思う。

「……しょうがないなあ」

仕方なく肯定と受け取れる返事をする、悠基は顔を輝かせて喜んだ。

「やった！　ありがとー、ヒコ」

人懐っこい笑顔を見せて笑う。一彦もその笑顔に思わずつられる。その笑顔に出会った瞬間に、心を重くしていた思考の流れさえ、いつだってどうでもよくなってしまうのだ。

「それじゃあ昼休みに決行しよう」

そう言つて悠基がにやりと笑う。一彦は至つて冷静な口調でそれに同意した。

「わかった。じゃあそれまでに考えておく」

詳しいことは何も言わない。しかし策を考えるのが一彦、それを実行するのが悠基という当たり前とも言える役割分担が彼らの中で一瞬にして決定していた。お互いそのことに疑いすら抱かない。

一方で、一彦と悠基の2人の間であつという間に話が進んでしまったことに、クラスメイトたちは驚きを隠せなかった。そもそも学年一の優等生とも言える一彦が悠基の片棒を担いで教員に悪戯を仕掛けるというだけでも耳を疑うようなことなのだ。それが、初めは断ったものの、最終的には悠基と一緒に悪戯を決行しようとしている。これに驚かずして何に驚けばいいと言うのか。クラスメイトたちは一様にそう思っていた。

「だからそろそろ席に戻れ。そろそろホームルームが始まるぞ」

ちらりと教室前方の時計に目を遣つて一彦がそう言つと、悠基は大人しく従つて席を後にした。意識はもうホームルームも授業も越えて、昼休みへと飛んでいつてしまっているのだらう。集まってきた

ていたクラスメイトたちもそれぞれに自分の指定席へと戻っていった。そんな中、ようやく自分の席に座ることが出来た前の席のクラスメイトがひとり、一彦に話しかけてきた。

「鈴木、本当にやるの？」

何故彼がそんな質問を自分にぶつけてくるのか。その理由を一彦は知っていた。

「やるよ」

素っ気無く答えて、一彦は頼杖をつきながら窓の外の秋晴れを見上げた。雲は多い。それでもその隙間から覗く淡い青色は太陽の光を含んで眩しく輝いていた。

（事を起こすには持つてこいの天気だ）

ホームルームの始まりを示すチャイムが響き渡った。それを待っていたかのように担任が教室に姿を現す。週番の号令に合わせて生徒たちが一斉に席を立った。挨拶をして再び席に着く。その瞬間に、一彦も意識を悠基と同じ場所に向かわせた。

窓の外では、白と白とを結ぶかのようにして、飛行機雲が青い空を横切っていた。

「先生」

職員室で、一彦は1人の教員に話しかけていた。昼休みも終わりに近づいた職員室は閑散としている。昼食を済ませ、喫煙や授業の準備で席を外している教員が多いからだ。一彦のその手には数学の教科書が握られていた。

「うん？　なんだ、鈴木」

机に座ってコーヒーを飲もうとしていた教員が顔を上げた。彼が一彦と悠基が通う高校の生徒指導教員である。

「さっきの授業でちょっと分からない場所があつて」

「鈴木が珍しいな。何処だ？」

一彦が教員の視線が届く位置でパラパラと教科書を捲ると、一緒

になって彼も一彦の教科書を覗き込んできた。

「あれ、えーっと……ちょっと待ってくださいね」

目的の場所が見つからないらしく、そう言つて一彦は眉を顰めた。

「さっきの授業の単元なら、132ページからだぞ」

「ああ、そうでしたね」

一彦の教科書に視線を送りながら教員が言つた。その言葉に適当に応えながら、教員の注意が完全にこちらに向かつていることを確認して一彦は彼の背後に視線を向けた。そこには教員に気付かれないうつ身をかがめて息を殺した悠基の姿があつた。一彦と目が合うと、悠基はにやつと笑つて右手を上げブイサインを作つて見せた。それに応えるようにして一彦も一瞬だけ笑顔を作る。しかしすぐに真顔に戻つて再び教科書に視線を落とした。

「ああ、これです。ここで何でこの公式が導かれるのかが分からないくて」

そしてようやく目的の問題を見つけたといった風に教員に尋ねた。本当は既に自分で調べて分かつているのだが、教員の気を引くために小芝居を打っているのだ。しかしそんなことは露も知らない教員は意気揚々とその問題の解説を始めた。はい、はい、と相槌を打ちながらも、一彦はそれを聞き流している。

教員が得意げに問題を解説しているその隙に、悠基は教員の机の上へと手を伸ばした。そして自分の役割を終えると、もう一度一彦に向かつて右手を上げて、来た時と同じように忍び足でその場から去つていった。一彦は笑い出しそうになるのを必死で抑えながらその様子を盗み見ていた。

「……と、いうことだ。分かったか？」

そう言つて、解説を終えた教員が一彦の顔を見上げた。それに対して一彦は神妙な顔で頷いて見せる。

「はい。凄く分かりやすかったです」

そして教科書を閉じ、礼を言つた。教員は満足げな顔で頷いていく。

「先生、ありがとうございます」

軽く頭を下げ、一彦は早足で職員室を後にした。

職員室を出ると扉のすぐそばで悠基が一彦を待っていた。お互いに笑って見せるがまだ会話は交わさない。開けっ放しの扉に隠れて、2人はたった今出てきたばかりの職員室の様子をこっそりと伺った。生徒指導教員の後ろ姿が見える。彼は先ほど飲もうとして中断していたコーヒーに手を伸ばしていた。添えられたスティックシュガーの封を切り、続けて2本、マグカップの中に注ぎ込む。それを見て早くも悠基が笑い出したが、一彦は静かにしるとばかりに彼を肘で小突いた。

教員が続いてミルクを入れた。そして淹れてから少し時間が経ってぬるくなってしまったであろうコーヒーを一気に口に含む。その途端、

「うっ、ゲホッ、ゴホッ！」

彼はそのコーヒーを吐き出しながら、苦しそうに咳き込んだ。慌てて手にしていたマグカップを置き、中を覗き込んでいる。一体自分の身に何が起こったのか、さっぱり理解出来ないらしい。咳を続けながら目を丸くしている。全てを知っている一彦と悠基の2人は、教員の醜態を見届けると溢れ出る笑みを抑えようとせず、その場から駆け出した。

「どうしたんですか!？」

教員の呻き声とその場に居合わせた人の驚いたような叫び声だけが、背後で滑稽に響き渡っていた。

職員室のある管理棟から教室棟の3階にある自分たちの教室へと戻りながら、一彦と悠基は実行したばかりの計画を振り返っていた。一彦が立てた悪戯の計画は、生徒指導教員が飲むコーヒーの砂糖を塩と味の素にすり替えるというものだった。非常に単純でありきたりな悪戯ではあったが、比較的楽に実行出来て長い遺恨を作らないということで一彦はこの悪戯を選んだ。また、以前職員室を訪れ

た際に件の教員がスティックシュガー2本分の砂糖をコーヒーに入れて飲んでいるところを目撃し、彼が甘党であることを知っていたということもある。

一彦が計画を悠基に話すと、彼は嬉々としてそれに同意して準備を始めた。幸い学校のすぐ近くにコンビニがあったため、ダミー用のスティックシュガーと塩、味の素は直ぐに手に入った。手先の器用な一彦がスティックシュガー2本を丁寧に開封し、中身をそれぞれ塩と味の素に入れ替える。糊を使って再び封をすれば偽物シュガーは完成だ。後は一彦が生徒指導教員の気を引いている間に悠基が砂糖をすり替えるだけである。すり替える瞬間を他の教員に認められたら計画は失敗に終わってしまうため、2人は慎重にそのタイミングを伺った。

かくして計画は実行に移されたのであった。

「あのリアクションはヤバかったよな」

堪えきれない笑みを口元に浮かべながら悠基が言った。彼は溜飲を下げたといった風で実にすっきりとした表情をしている。

「一体どこの芸人かと思った」

隣を歩く一彦も珍しく楽しそうな様子だ。自分の計画にまんまとひっかかった教員の姿が面白くて仕方がなかったらしい。

「すげえスツキリした。ざまあみろ、だな」

「いい気味だ」

しかし一彦のこの言葉を聞いて悠基が驚いて見せた。

「あれ、ヒコってアイツ嫌いだったっけ？」

それに対して一彦は少し俯きながらポツリと答えた。前髪が瞳に影を落とす。

「嫌い、ってほどじゃないけど……自分の間違い認めないし、宿題の量多いし、好きじゃない」

一彦は普段、教員に限らず他人に対して不満や愚痴を殆ど言わない。しかし今日、教員への怒りを露わにした悠基の誘いにのって悪戯の片棒を担いだ。最初は嫌がりながらも、最終的には悠基と一緒に

になつて悪戯を楽しんでいた節がある。少しも逆らうことなく流れに従っているように思われがちだが、一彦だつて人並みに不満や苛立ちを抱いているのだ。

（たまには、こういうのもいいのかもしれない）

どちらかと言えば、この計画を実行したことによってより溜飲を下げたのは一彦のほうだろう。こんなこと、自分ひとりでは決して出来ない。

「だから、楽しかったよ」

俯いた顔を戻して、自分よりも身長の高い悠基を見上げて呟く。それを聞いて悠基は一瞬きよとした表情を浮かべたが、直ぐにそれを幸せなものへと変貌させた。

一彦は不思議な気持ちになる。

今朝、一彦が悠基と一緒に教員へ悪戯を仕掛けると決めた時、クラスメイトたちは驚きの表情を浮かべてそれを疑った。一彦がそんなことをする筈がないと彼らは勝手に決め付けているからだ。しかし悠基は違った。下手な決め付けをせずに、純粹に一緒にやりたいと思つて誘つてくれたのだらうと思う。それも真つ先に。

（俺は、どうすればいいんだらう）

つらいとか、悲しいとか、苦しいとか。彼にはそんな自分を教えてしまつてもいいのかもしれない。けれどもくだらない感情がそれを邪魔する。悠基は「一彦」を知っている。彼はすでに倒すべき相手ではなくなった。それなのに。決して負けたくない、そんな思いが今でも一彦の中には確かにあるのだつた。自分は一体誰と戦っているのだらう。何と戦っているのだらう。終わりなど訪れないと知っているはずなのに。

一彦は悠基の笑顔に応えて笑つて見せようとしたが、上手くいかずに視線を逸らした。そしてそれを悟られないように言葉を紡いだ。「でも、バレてないかな」

それに対して、悠基は何も気付いていない様子で大丈夫だよと繰り返して笑つた。

「気が付くほど賢くないって。それに今頃、心当たりがありすぎて悩んでるぜ、きっと」

それを聞いて一彦は思わず噴き出してしまった。一彦が想像した教員は職員室の机に腰掛けて心当たりのある人物の名をぶつぶつと呟いており、その姿は実に滑稽であった。

「確かに、そんな気がする」

一彦が笑いながら同意すると、悠基も嬉しそうに言った。

「だろ？」

「ああ」

その瞬間。すう、と。気持ちが軽くなる。開け放された窓から少し熱を持った風が入り込んで廊下を駆け抜けていく。目には見えないう、それでもやさしい光が足跡のように零れる。要らない感情を手にする余地のないように、一彦は空っぽの手のひらを軽く握った。

「これで次のマナーアップ運動までは頑張れるな」

しかし悠基のこの言葉を聞いて眉を顰めた。自然と口調が刺々しくなる。

「は？ まさかこれからマナーアップ運動がある度にやるつもり？」

「気分によっただけ。その時はまたよろしくな」

「やだよ」

一彦は話を最後まで聞くことなく悠基の頼みを一蹴した。

「こっということは、1度やれば十分だ」

そして歩調を速めて不満そうな顔つきをしている悠基を引き離す。うんざりすると同時に、呆れて物も言いたくなくなってしまった。

叱られる度の仕返しに、毎回巻き込まれてしまったては堪ったものではない。

しかし直ぐに悠基は追い付いて文句を言ってきた。一彦は投げやりに返事をしていたが、それでも決して腹立たしくはなかった。それは彼と一緒に行動を起こして、何処か楽しかったという感情が身体の中に残っているからなのだろうと思う。そういうものなのだ、きっと。

文句を言いながらも、悠基は笑っている。それを受け流す一彦の口元も笑っている。

教室に戻ってきた一彦と悠基を迎えて、悪戯の実行を知っているクラスメイトたちが2人に元に集まってきた。面白おかしく、悠基が彼らに事の顛末を話して聞かせる。一彦はその隣で他人事のような顔をして悠基の話を聞いていた。

ぼんやりと眺めた視界の端で、量を減らしつつある雲を押し退けるようにして太陽がその存在を主張していた。

いつかこの心が晴れる日がやってくるのだろうか。そんなことを思った。

そつと開けた和室の中にはまだ誰もいなかった。締め切られた室内は幾分か暑く感じられ、一彦は和室に入ると風を取り込むために直接窓に向かった。新鮮な空気は一彦の気持ちを落ち着けたものへと変えていく。

（教本でも読もうかな）

いくらやる気があっても1人では稽古は出来ない。一彦は誰か他の部員が来るまで茶道の教本を読んで待つことにした。和室の片隅に胡坐を組んで座り、カバンの中から分厚い本を取り出す。開け放された窓の外は様々な音や声で溢れていたが、気にならなかった。糸を張ったような静寂だけが和室の中には流れている。

しばらく1人で本を読んでいると、すうっと静かに障子が開いた。「こんにちは」

その声に本から顔を上げると、障子の向こうで和樹が正座をしていた。和樹は一彦が所属する茶道部の部長である。

「池田先輩。こんにちは」

一彦は本を畳の上に置きながら座り方を正座へと変えた。

「今日は早いね」

「はい、掃除当番がなかったんで」

にじりながら和室に入り障子を閉めると、和樹は一彦のほうへと近づいてきて少し離れた斜め前の位置に腰を下ろした。

「今日の薄茶はガラス茶碗にしようと思うんだ」

そう言って、和樹が持っていた紙袋から両手で箱を取り出した。その中には透明な青色のガラス茶碗が入っていた。窓から差し込む光の具合で、場所によって様々な濃淡の青色が現れている。綺麗だった。

「え、でももう9月下旬ですよ。ガラス茶碗は真夏の道具では……？」

しかし一彦はそれを見て首を傾げた。

茶道は季節感をとて大切にしている。茶室に飾る花や掛け軸、使う道具の形やデザイン、そして食べる菓子でさえ歳時のものを調和させながら取り入れているほどだ。ガラス茶碗は見た目のその清涼感から現代では真夏の暑い時期に使われることが多い道具である。しかし9月下旬の今となつては、ガラス茶碗は季節に合わないのではないだろうか。そう思つて一彦は先ほどの言葉を発したのであった。

それを聞いた和樹は目を細めながら言った。

「確かにそうだね。でも、台風一過で今日は久々に暑いだろ？　だからガラス茶碗のほうが美味しくお茶が飲めると思つて」

そして続けた。

「鈴木は「茶は服のよきように点て」って言葉、知ってる？」

「はい、本で読みました。確か利休七則の1つですよ」

利休七則とは茶の湯の大成者と言われる千利休が茶道の上で心得ておくべき最も大切なこととして述べた7つの教えのことである。

「茶は服のよきように点て」はその中で最も初めに言われた言葉で、意味は「お茶は飲んで美味しいように点てましょう」というとても単純なものだ。しかし舌で味わつて美味しいと感じるだけではこの言葉の意味には適わない。ただ高級なお茶を買つて点てたとしても、そこに点てた人の心がなければ客は決して満足しないだ。

「同じ利休七則の中に「夏は涼しく冬は暖かに」って言葉があるけど、これも茶を服のよきように点てるためのものだね」

「そう、ですね」

季節はもう秋だ。夏の道具であるガラス茶碗は、確かにもう合わないのかもしれない。しかし台風一過で気温が上がった今日。決して真夏ほどの不快感はないが、ここ数日は肌寒い日が続いていたために、すっかり感覚が夏に逆戻りしてしまった人もいるはずだ。そう考えると、涼を得られるガラス茶碗は今日のような日にはもってこいのように思えてくる。どうすれば気持ちよく、楽しく、美味しく、お茶を飲むことが出来るか。客を、相手を、思いやること。ガラス茶碗は夏の道具であるという単なる知識に捕われないその心が、茶を服のよきように点てるのだ。

凄いな。純粹に、一彦は思う。

付け焼き刃ではない、芯の通った世界が和樹の中には構築されているのだろう。それを当たり前のように他人に与えることが出来る。それも押し付けがましくなく、ごく、自然に。

どうして、そんな言葉ばかりが頭の中を巡る。

「どうして、先輩はそんな風に考えられるんですか」

思わず一彦はそう尋ねていた。ちよつとだけ困ったような顔をして、和樹が笑った。

「特別、強く意識してるわけじゃないんだよ。ただ俺は小さい頃からお茶は習っていたから、茶道の考えが沁み付いてるのかも知れないね」

そして首を曲げて、少し離れた床の間へと視線を向けた。つられるようにして一彦も同じほうへと顔を動かす。日は好日。そう書かれた掛け軸が、床の間には掛かっていた。

今日も1日いい日でありますように。それはきつと、誰しもが心の中で願っていることだ。しかし願い通りにいかないのが現実で、太陽が雲に隠れるように、誰かの悲しみが滴となって降るように、怒り、悲しみ、心を乱すことばかりが起こるかもしれない。それで

も巡ってきた1日は今日限りのものであり、それはかけがえのない1日だ。必ず明日が来るなどと、一体誰に約束出来るだろう。たとえ心に嵐が訪れようと、その日1日を確かに過ごすことが出来れば、それはその人にとって素晴らしい1日となるなのだ。

「ただ願って待つだけじゃ、駄目なんだと思う。全てに動じない心を持つのはとても難しいことだけど、自分の力で価値を見出していかなければいけないだよ」

穏やかな声で、それでいて真剣な眼差しで、和樹が話している。

相槌を打つことも忘れて一彦は彼の言葉を聞いていた。一語一句、その息遣いさえ、聞き逃したくないと思った。

「自分が多少大変でも、好きな誰かが喜んでくれたり楽しい時間を過ごしてくれたりすれば俺はそれでいいって思うんだ。そう思っているのも行動してる。それが俺の見つけた価値で、たまたま、それが茶道に通じていただけなんだよ」

鈴木にも、いつか見つかるといいね。そう言って、和樹が目を細めて笑った。

（ああ、そうか、それがこの人の原動力なんだ）

ジグソーパズルの最後のピースが嵌まるかのように、和樹の話がずとんと一彦の中に落ちた。やさしくて強い人だ。かつて、一彦は彼のことをそう思った。それは自分の毎日に、生き方に、価値を見出しているからなのだろう。だからこんなにも、羨ましく思えるのだろう。

「そういえば、」

そう言って、和樹が切り出した。

「来月の学園祭のお茶会が終わったら、俺を含めた3年は引退なんだ」

「ああ、もう、そんな時期なんですね」

憂いを含んだ声で一彦は応える。

高校3年生の秋ともなればもう受験勉強に真剣になって取り組まなければならない時期だ。茶道部の活動は毎日あるわけではないが、

負担は少しでも減らしておいたほうがいい。和樹が引退した後の部長は、現在2年生である副部長が務めることに決まっていた。

「この前他の3年と副部長の見波で相談をしたんだけど、俺が引退した後は鈴木に副部長になってもらおうと思ってる」

「俺が、ですか」

「そう。お願い出来るかな」

穏やかな表情を向けられて、一彦は思わず俯いてしまった。そして考える。副部長になるということは、いずれ部長になるということだ。決して嫌ではないし、期待されて嬉しくないこともない。それでも自分に務まるだろうかという不安はあった。自分で、いいのだろうか。

「頑張ります」

考えて、一彦はそう言った。思いつめたような口調だった。

「……頑張らなくてもいいって言っても、鈴木は頑張るんだろうね」「え」

ぽつりと小さな声で呟かれたその言葉に驚いて、一彦は顔を上げて和樹の顔を見た。和樹もじっと、一彦のほうを見ていた。

「鈴木、頑張ってもいい。だけど、無理はしなくていいんだよ」

哀れむような、慰めるような。やさしげな和樹の言葉。けれどもその言葉は確かに一彦の心を揺さぶった。

「それは、どういう……」

尋ねようとしたその時、カタンと音がして障子が開けられた。一彦と和樹が揃って顔を向けると、そこには副部長の咲が座っていた。

「こんにちは」

「見波先輩、こんにちは」

口々に述べると、咲はすっと自然な動作で頭を下げて挨拶を返した。背中まで伸びる細く長い髪が肩口から零れる。

「池田先輩、鈴木くん、こんにちは」

笑顔が実に気持ちがいい。咲は和室の中に入ると、障子を閉めて一彦と和樹のそばに腰を落ち着けた。そして和樹が持ってきたガラ

又茶碗に目を留めた。

「あ、今日はガラス茶碗ですか？ 涼しくていいですね」

「ありがとう。それじゃあ、時間も勿体無いし先に稽古を始めようか」

「はい」

和樹の言葉を合図に3人は一様に立ち上がり、それぞれに稽古の準備を始めた。この半年の間に、誰かが何を準備するのか、大まかな役割分担が出来上がっていた。

一彦は抹茶を用意するために、点前の準備を整えるための水屋と呼ばれる場所へと向かった。しかし心がざわざわと動いて落ち着かなかった。先ほど和樹に言われた言葉が頭の中を巡っていた。

いつまで経っても波は去らずに、この日の稽古では一彦は多くのミスをしてしまった。注意をされる度に、すみませんと言う自分の声小さくなっていくのが分かった。落ち着かなければいけない、そう頭では分かっているけど、感情がついていかなかった。

次第に赤味を帯びていく太陽の光が障子の隙間から差し込んで、ちりちりと一彦の心に影を落していく。

稽古を終えて和室から出た時、一彦は自分が一体何を注意されたのかさえ、全く覚えていなかった。

俯きながら、ぼんやりと歩いていた。早く帰りたいと思いながらも、何処かこのままずっと歩いていたいような気もして歩幅は不規則だった。すれ違う人たちは一様に前を向いていて、自分だけが流れに乗れない酷く惨めな人間のように思えてならなかった。

「ヒ、コー」

投げかけられた言葉に立ち止まり後ろを振り向くと、そこには竹刀袋を左腕に抱えた悠基が立っていた。目が合うと、

「やっぱりヒコだ。一緒に帰ろう」

そう言っただけでも通りに笑った。

「うん、」

上手く表情が作れずに、一彦は曖昧な笑顔で応えた。悠基が小走りで一彦の左隣にやってきて、2人は並んで歩き出す。街を行き交う人々と同じように悠基は前を向いていて、一彦は相変わらず視線を斜め下に向けたままだった。

「今日稽古だったんだろ？ 元氣ないけど」

一彦の様子がいつもと違うことに気が付いて悠基が尋ねた。

「うん、」

それに対して一彦は気の抜けた返事を返すだけだ。稽古前に和樹に言われた言葉が未だに頭の中を離れなかった。

夏至が過ぎ、夏が終わって、あつと言う間に訪れるようになった日没。橙の光の手がいつもより速い速度で遠ざかっていく。それでも星の光はまだ見えない。太陽の残光だけが心許なく世界を照らしていた。天頂は夜闇、空の端は茜色にそれぞれが染まって、視界の片隅でどろどろと溶け合っている。そして間もなく空は色を失くすのだ。

全てを失ってしまったら、一体何を頼りに歩けばいいのだろう。

「……ヒコ？」

悠基が黙り続ける一彦を心配そうに見つめた。

「どーしたんだよ？」

その顔を腰を屈めて覗き込む。一彦は顔を背け、悠基の肩を押して彼の身体を遠ざけた。

「別に」

「別につつーツラじゃねえだろ」

そう言って口を尖らせる悠基に、一彦は意を決した様子で尋ねた。少しだけ視線を上げる。

「佐藤は、自分のこと好き？」

その質問に悠基は一瞬だけ眉を潜めて考える素振りをしたが、直ぐに言葉を紡いだ。

「俺は、時々嫌になることもあるけど、好きだよ」

はつきりとした彼の口調は一彦の予想した通りのものだった。

（ああ、やつぱり）

そうでなければ、あんなに自信を持って生きられない。

一彦は目を細めて再び俯いた。

「そう、よかったね」

そしてほんの少し歩く速度を早めた。一歩遅れる形となった悠基は、それでもその歩調を変えない。

「ヒコは？ 嫌いなのか？」

「嫌いだよ。大嫌いだよ」

純粹な悠基の質問に、一彦はきっぱりとした口調で答えた。一彦の斜め後ろを歩く悠基の、その表情は分からない。

いい子とか、真面目とか。優等生であって、それで何だっていうのだらう。期待が増えて、負担が増えて、ただ、それだけじゃないか。

頑張らなくてもいいって言っても、鈴木は頑張るんだらうね。

負けるのは嫌だった。勝たなければ嫌だった。頑張らなければ、何も出来なかった。

それをやめたら、自分に一体どんな価値があるだらう。期待を裏切った時、失望された時、存在価値は残っているのだらうか。

（俺には、何もないな）

何よりも、自分で自分自身に絶望してしまうのが怖かった。大嫌いだよ、そう思った。

俯く一彦の視界の端で夜が滲んだ。ひしひしと、ひしひしと溢れだした闇の気配が色を濃くする。痛みを感じているのは何処だらう。しばらく無言のままで、一彦と悠基は歩いていった。ぼんやりと一彦は下を向き、悠基は変わらずに真っ直ぐ前を見ていった。

先に口を開いたの悠基のほうだった。

「俺は、ヒコのこと好きだよ」

そう、呟いた。

（コイツは、また調子のいいことを）

悠基のその明るい声に、思った。少しだけ腹が立ち、文句のひとつでも言ってやろうと一彦は立ち止まって悠基のほうを振り向いた。しかし予想に反して、彼は全く笑ってはいなかった。

何だか酷く、悲しくなってしまった。

悠基はいつもの笑みを収めて、真剣そうな、しかし何かの痛みに耐えるような表情をしていた。見てはいけないものを見てしまったような気がして、一彦は彼の顔から視線を逸らした。何も言うことが出来なくなってしまった。

しかし悠基はそのまま言葉を続けた。

「ヒコは、俺のこと好き？」

何か言わなければ。そう思った。応えなければ。

一彦は悠基を見ていない。しかし彼の視線が自分に向けられているということが痛いほどに感じられた。一彦は声を絞り出した。

「……嫌いじゃ、ない」

一彦のこの返事を聞いて、悠基が声を弾ませた。

「なら、ヒコのことを好きな、俺を好きになつてよ」

「は」

発された言葉の意味が分からずにポカンとして悠基の顔を見上げると、

「な？」

悠基は自信満々でそう言つて、一彦の好きな笑顔で笑って見せた。その笑顔に心がほどけていく。

（ああ、それで、いいのかもしれない）

時に鬱陶しいと思いつつも、その自由奔放な言動に追いつめられながらも、それでも悠基を突き放せないのは。最終的に、一緒にいるのは。

「……うん」

一彦は小さな声で頷いた。悠基に届くか届かないか、それはギリギリの声ではあったけれども、悠基はその笑顔をより一層濃いものへと変えた。きっと、伝わったのだろう。

そして悠基は今度はこう言った。

「だから、ヒコはヒコでいいんだよ」

誰よりも早く学校に来て、勉強して、俺を怒って、校則を守って、部活して、ちゃんと宿題して、だけど俺の我儘にも付き合ってくれて、時々失敗もして、

「そんな、ヒコがいいよ」

悠基の言葉に一彦は顔を歪めた。泣けばいいのか、笑えばいいのか、分からなかった。それでも何かを伝えなければいけないと思って、首を縦に振った。

いつかの帰り道にした願いごと。勝ち負けを超えて、

（ただの親しい友達になれたら、）

叶えるのは、今だ。

決して「いい子」ではない部分を知りながら、それを肯定し、認めてくれる。それでいいのだと、存在してもいいのだと。

自分を好きだと言ってくれる人を好きになる。それは酷く遠回りなことなのかもしれない。それでも、それで少しでも自分自身を肯定することが出来るなら、決して間違いではないのだろう。

（間違ったかどうかは、自分で決めればいいんだ）

そう思う。

「帰ろう」

微笑みを浮かべながらそう言って、悠基が歩き出す。頷き、再び歩調を合わせて一彦も歩き出した。今は真っ直ぐに前を見ている。肩を並べるそのふたりの姿を否定する者など誰もいないだろう。

見上げる空に相変わらず星は見えない。視界の隅でくすぶり続ける橙が今にも息を引き取ろうとしている。その色が何処から来て何処へ消えるのか、今だけは知りたくなかった。ただ最後にその色が終わったとしても、夜闇は決して無にはならないのだろう。青を失い、光を失くしても、空は堂々とそこにある。

「ありがとう」

自然と言葉が口を突いて出た。

今日もいい1日になりますように。叶えるのは自分自身だ。雨が降っても、予期せぬことに感情をかき乱されたとしても、全ての基準は自分の中にしかない。誰かの肯定する幸せを、誰かの否定する痛みを、同じように受け取り手放したとしても、手のひらに残るのは虚しさだけだ。

（いい、1日だったな）

心からそう思える。

隣を歩く存在がある。ふたりでいられる。願ったいつかに辿りつける。そんな気がしてならない。

「ありがとう」

一彦に伝えて、悠基も感謝の言葉を伝える。その言葉の真意を一彦は臆気にしか理解出来ないが、今はそれでいいように思えた。

コンビ二に寄ろう、と悠基が提案した。中華まんが食べたいのだと言う。一彦がそれに賛成すると、

「肉まんかなー、ピザまんかなー、あんまんかなー」

悠基はそう声を弾ませた。

「俺はあんまんがいい」

「えっ、じゃあ俺ピザまんにする。一口ちょーだい」

「……自分で買えば」

「なんだよ、一口くらいいいだろ！」

中華まん1つに一喜一憂する、小さな子どものような悠基の言動に呆れながらも、一彦は笑顔がやめられなくなってしまった。

（だから、離れられないんだ）

そして、それでいいのだろう。

交差点を曲がると目的のコンビ二が現れた。看板が煌々と光を放って空を照らしている。光は身近にあるものなのだとようやく気が付く。

明日もいい1日になりますように。

悠基が入り口の扉を開くと、店員の明るい声が耳に届いた。中華まんが食べたいと言っていたはずだが、悠基は真っ先にスナック菓

子の売場へと向かった。直ぐに帰れそうにはないなあ、一彦はそう思いながらも彼の後を追う。今日はとことん悠基に付き合おうと決まっていた。頑張るのはまた明日からでいい。

菓子のコーナーにたどり着くと悠基が笑顔で待っていた。その瞬間、少しだけ自分を好きになったような気がした。

昨日と何も変わらない教室。朝の喧噪は相変わらず憂鬱で、直ぐそばの窓を開けて自分を含めた全てが風に飛ばされてしまえばいいのにとさえ思えてくる。

隣の席のクラスメイトが昨夜放送されたバラエティ番組を見たかと尋ねてくるが、見ていないので正直に答える。感動を共有したいのであるう彼はその番組がいかに面白かったのかを熱弁し始めた。聞かされる内容よりも彼のその様相のほうが面白く、こんな毎日もそれはそれでいいのかもしれないと感じられた。

「おっはよー」

聞き慣れた声が教室内に響き渡った。悠基の声だ。それに応えて様々なおはようが声を上げている。

「佐藤ー、お前球技大会何に出る？」

そんな中、そう尋ねたのは体育委員を務めるクラスメイトだ。1ヶ月後に控えた学園祭の中で球技大会が行われるため、今からクラスメイトたちの出場種目を決めておきたいのだろう。

「バスケなら結構得意だよ」

「お、うちのクラスバスケ部4人いるし、勝てるんじゃない？」

悠基の言葉を聞いて、体育委員が目を輝かせた。
「バスケで優勝狙っちゃう？」

どの競技にも通じる悠基の運動神経のよさはすでに周知のことだった。しばし教室内が球技大会の話題で盛り上がる。ホームルームの時間でもないのに、黒板を使ってクラスメイトたちの出場競技が決められていく。

「ヒコは？ 何に出るの？」

なかなか参加希望種目に手を挙げない一彦を見兼ねたように、悠基が尋ねた。

「え、俺は球技苦手だし、全員参加のドッチだけでいいよ」

一彦はどちらかというと運動は好きだったが、球技はどうも苦手だった。ドッチボールならばひたすら逃げ続けているだけで競技に参加出来る。自由参加であるならば、出来れば他の種目には出場しなくなかった。それを知っているのかどうかは分からないが、悠基が一彦を他の競技に誘うことはなかった。

「よし、じゃあドッチでも優勝狙おうぜー！」

その悠基の言葉に、教室が異様な盛り上がりを見せる。悪くない気分だった。

「みんなー、優勝したら佐藤が全員にジュースおごるってー」

一彦が珍しくふざけてそう言っていると、クラスメイトたちは先ほど以上にテンションを引き上げた。

「おー！！」

「俺肉がいい！」

「よっしゃ、頑張ろうぜー！」

「ちよつと待て、今肉って言ったの誰だ！？ つーか俺にそんな金があるわけないだろ！」

口々に好き勝手なことを言い始めたクラスメイトたちに悠基が情けない抗議の声を上げる。余計なことを言うなよ、と悠基が視線を一彦のほうに向けてくるが、気にならない。

「鈴木、お客さん」

ふと声を掛けられて教室の入り口に視線を送ると、そこには同じ茶道部に所属する優衣の姿があった。何だろう、そう思いながら一彦は席を立って彼女の元に向かった。

「おはよう、太田さん」

「おはよう」

挨拶をして微笑み掛けると、優衣も同じように笑って見せた。

「みんなで盛り上がってるところにごめんね」

「ううん、大丈夫。佐藤がバカやってるだけだから」

一彦の言葉に優衣が声を上げて笑う。

「さっき見波先輩に会ったんだけど、明日の稽古は学園祭でやるお茶会について話し合うから出来るだけ休まないで欲しいんだって」

そしてやさしい声で用件を告げた。学園祭のお茶会、それは3年生引退前の最後の舞台だ。それを思うと胸が熱くなる。協力したいものにしたいと思う。

「分かった。わざわざありがとう」

一彦がそう言うと、優衣がふと真顔になって一彦の顔を見た。急に見つめられて一彦は困惑してしまう。すると再び笑顔になって優衣が尋ねてきた。

「鈴木くん、何かいいことあった？」

「え？」

一彦は驚きで目を見開く。

「……どうして」

答える前に尋ね返すと、

「なんとなく、そんな気がしただけ」

優衣は少しだけ困ったような表情をして視線を落とした。

いいこと。そう言われて脳裏に浮かんだのは昨日の出来事だ。昨日と今日とで自分に何か変わったところがあるとするならば、それはきつと。

「……いいこと、あったよ」

ポツリと呟くと、それを聞き取った優衣が顔を上げた。視線が合つて、笑みがこぼれる。

「気が向いたら、今度教えてよ」

優衣のその言葉に一彦は再び驚かされる。一体何を言えばいいのだろう。うまく話せるだろうか。

（それでも、自分に興味を持ってもらえるのは嬉しいことだな）
そう思う。

「気が向いたらね」

それは素っ気ない返事ではあったけれども、優衣にはそれで十分であつたらしい。につこりと笑つて見せる。

「うん。ありがとう」

それじゃあまたね、そう言つて優衣は一彦の教室を後にした。やわらかな髪が揺れ、2つ隣の教室へと消えていく。

キンコン……。

ホームルームの始まりを告げるチャイムの音が耳に届いた。同時にドタバタと廊下を走る足音が聞こえる。遅刻の滑り込みセーフを狙っているのだろうか。一彦たちの担任の姿はまだ見えないが、早めに席に着いているに越したことはないだろう。

一彦が指定された窓際の席に戻ろうと振り向くと、教室の中、窓一面に広がった青空と目が合った。不意に泣き出しそうになったが必死で堪えた。

（いきたい場所は、直ぐそこにある）

いつか消えてしまうその前に。

一彦は目を細め微笑んで、限りある青空の隣へと歩き出した。青の光が、黙ったままその様子を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5022p/>

4．寂

2010年12月14日21時25分発行